アカ語の現地調査より

桂　満希郎

1 はじめに

私は京都大学東南アジア研究センターの留学生として，1964年6月20日より1965年10月8日までの約1年4ケ月タイ国に滞在したが，その間に主として北部タイ国のいろいろな土地を訪れた。というのは，私のタイ国滞在の目的というのが，①標準タイ語の習得，②タイ国北部方言の調査，③北部タイにおけるアカ語の現地調査にあったためである。主なる調査地と滞在期間との概略を示すと次のとおりである。

①1964年6月20日～1964年9月15日……バンコク
②　〃　9月16日～　〃　10月15日……チェンマイ
③　〃　10月16日～1965年1月10日……チェンライ
④1965年1月10日～　〃　3月9日……バンコク
⑤　〃　3月10日～　〃　6月9日……チェンライ

勿論この他にも，メーホンソーン，メーサリエン，ファーン等をはじめとしていろいろな土地を訪れたが直接には調査に関係がないので省略する。チェンマイにおいては2人のインフォーマントを使って，北部タイ国の代表的な方言であるチェンマイ方言の調査を行なった。しかし，これはそれ自体を目的とするものではなくて，次に行なうアカ語の現地調査のために必要な程度の知識を身につけるために行なったのである。また，バンコク滞在中はチュラロンコーン大学文学部にて講義に出席していたのであるが，この大学については以前に書いたことがあるので，今回はアカ語の現地調査及びアカ族の村における私の生活について書きたいと思う。

2 アカ族

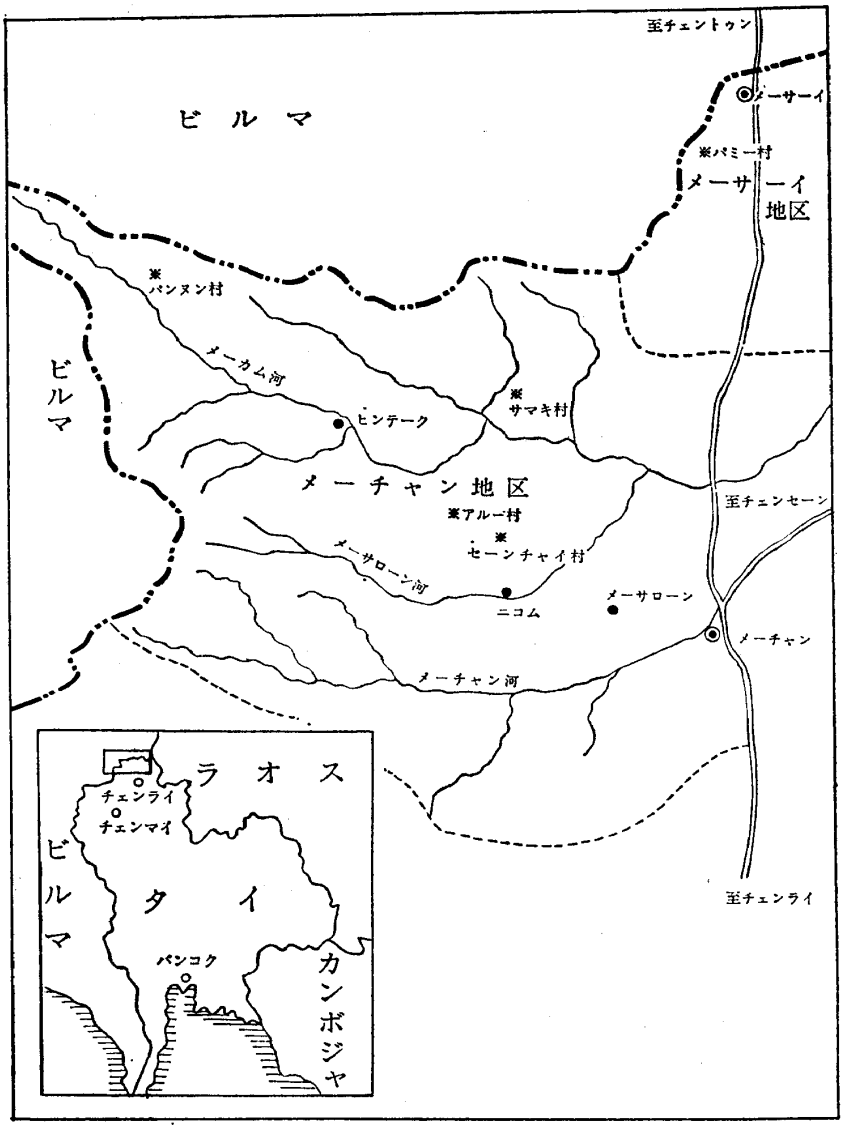
タイ国北部には，タイ系の諸民族以外に，いろいろな民族が住んでいてそれぞれ異った言語を話している。これらを大別すると，①チベット・ビルマ系，②モン・クメール系，③タイ系・④カレン系，[1] ⑤メオ・ヤオ系などである。[2] アカ語というのはこれらのうちの①チベット・ビルマ系に属し，同じ系統に属すると考えられるものにラフ語（ラフ・ナ語，ラフ・ニ語，ラフ・シ語），リス語などがある。これらはいずれもタイ国北部の山岳地帯で話されており，たがいに近い関係にあると考えられる。また，これらの諸言語はタイ国内のみならず，ビルマ，ラオス，中国の雲南省においても話されている。しかし，タイ国におけるこれらの言語はまだ科学的に調査されたことがなく，言語学的にみて興味深いものばかりである。私は，当初においては，これら諸言語のおのおのについて少しづつ資料を収集し比較言語学的研究に役立てたいと思ったのであるが，実際に現地におもむいてみて最初の考えが変り，アカ語一言語をえらんでそれを詳しく調査することにした。

タイ国内におけるアカ族の居住地は極めて限定されている。すなわち，タイ国北端に位地するチェンライ県[3]のまた最北部にあるメーサーイ，メーチャン，チェンセーンの各地区に居住するのみである。やや南のメースオイ地区にごく少数が居住し，彼らは最近にメーサーイ地区から移住したものだといわれているが，実際に行ってたしかめたことがないのでよくわからない。チェンライの町の北をメー・コック河が流れているが，アカ族がこの河より南に移住したことはまだないと考えてよいだろう。しかし，アカ族の分布全体からみれば，タイ国におけるアカ族はその分布の南限を成すものであろう。

アカ族が最も多く住んでいるのは，ビルマのシャン州（チェン・トゥンを中心とする地域）で，ここには60,000人近くが居住するといわれている。タイ国内においては，ゴードン・ヤングによれば，[4] 約25,000人とされているが，統計にまだ含まれていない部落も存在すると思われるので，実際の数はこれをやや上まわる

注 1. カレン語の系統については，まだ一致した意見がないので，ここでは仮に「カレン系」として別個に取りあげておく。
注 2. インド人，中国人もいるが，これらは主として商人として入って来たもので，調査とは関係ないので省略する。
注 3. タイ語の /caŋwàt/, /ʔamphəə/, /tambon/ を，それぞれ「県」，「地区」，「村」と訳しておく。別に特別な根きょがあるわけではなく，便宜的にこう訳すだけである。
注 4. Gordon Yang:Hill Tribes in Northern Thailand, Bangkok, 1961

であろう。そして，この大多数が，チェンライ—メーサーイを結ぶ道路，メーコック河及びビルマ国境に囲まれる山岳地帯に居住すると考えてまちがいないだろう。この部分には，メー・カム，メー・サローン，メー・チャンという3本の河がいずれも西北より南西に向って走っているが，これらの流れにそった山には，大小をとりまぜてアカ族の部落が点点と存在するのである。くわしくは図を見ていただきたい。黒丸がアカ族の居住地と考えられる地域である。



上に述べたようにその居住地域が限られているため，実際にアカ族の姿を目にするには少くともメーチャンまで行かねばならない。チェンライの街から北に約30キロ程行ったところにある小さな町である。現在でも，メーサーイ，チェンセーン，チェンコーンといった国境に通ずる交通の要所としてかなりにぎわっているが，今ほど国境問題のうるさくなかったころには，タイ，ビルマ，ラオスの各地から集った人達でさぞかしにぎやかだったろうと想像される。ここの市場などでは，山からおりて来たアカ族がブラブラ歩いているのによく出合う。他に，ラフ族，リス族，ヤオ族なども多く見かける。私の場合も，あの一種独特の姿をここで初めて目にしたのである。服装について少し述べる。男女ともに基本は紺であるが，それにいろいろな装身具をつけるので，非常に目につきやすいものとなっている。女子は，まず，はばの広いブラジャーとでもいうべき胸あてをし，その上からボタンのない長袖の上着を着る。下はヒダの多いスカートのようなものを，今にも落ちそうな低いところではいている。これがひざまでとどかない位の長さであるが，ひざから下は装飾をほどこしたゲートルのようなものをまいている。大体はだしであるが，中にはタイ人の町から買ったゴムぞおりをはいているものもいる。そして，銀の腕輪，首輪をはじめとして，ありとあらゆる装飾品をぶらさげている。男子は女子にくらべて非常に地味で，やはり紺の上着に，スソの広くなったズボンをはいている。ただ正装の場合は，これに銀の装身具をつける。男は弁髪であり，女の場合は腰までとどきそうな長髪を高くまきあげて，その上にアカ語で／'ùch'φ／と呼ばれる頭飾をつけている。この／'ùch'φ／が，アカ女性の最も顕著なものではないかと思う。木あるいは竹をうすくそいだもので土台を作り，それに布地をはってから，ワラ，木の皮，動物の毛，尻尾，ビルマルピーなどで装飾をほどこし，なかなか美しいものである。これは髪をすく時以外は，仕事をする時も，死んでうめられる時も，取りはずすことはないのである。

アカ族の少女，セーンチャイ村にて

タイ語の話せる者は案外少ない。この辺のタイ語は中央の標準タイ語とはかなり違った北部方言であるが，私の感じでは，非常にシャン語に近いようである。山地民は，自分で作ったゴザ，トウガラシ，時には動物の皮や角などを持って山からおりてきて，それらを売ってえたわずかな金をはたいて，油，塩，ランプ（罐づめの罐を改造したもの），運動ぐつなどを買っていく。このように平地のタイ人を相手にする場合は，この北部方言を話すわけであるが，これも非常にシャン語風に変形して話しているようである。タイ人の町から最も近いセーンチャイ村（タイ語を教える小学校を有する唯一の村）を別とすれば，タイ国内に住んでいる割には，タイ語の話せる者は少ないのである。これに反して，ほとんどの者がシャン語，ラフ・ナ語を話すことができる。大体にいって，山地民同志の間——例えばアカ族とラフ・シ族との間——ではラフ・ナ語を話し，平地の人間を相手にする場合にはシャン語を話すことが多いようである。雲南官話の解る者もかなりあるが，メオ族，ヤオ族に比べてその数はずっと少なく，また話せる程度も低いといえる。最近ビルマから国境をこえて入ってきた者で，ビルマ語の話せる者もいるけれど，そのビルマ語というのは非常に荒っぽいもので，あまりこみいった話のできる程度のものではない。ただ，このことは男子についてのみいえることであって，女性の場合は，ほとんど全員がアカ語しか話せないといってまちがいないだろう。アカ族について本格的な調査を行なうためには，今のところ，シャン語——うまくゆけばタイ語の北部方言——から入って，いずれはアカ語を使っての調査へもっていく必要があるのではないかと思う。

この地域は，タイ，ビルマ，ラオスという3つの国の国境に近いところであり，トランジスターラジオをかけても，タイの放送よりラングーン放送のほうがはっきりとキャッチできる程である。それだけにいろんな種類の人間が混じりあって住んでいる。アカ族はビルマのシャン州からタイ国に入ったとされているが，いつごろタイ国内に住みつくようになったかということについてはいろんな説があるけれども，せいぜい50年くらい前のことではないかといわれている。いずれにしても，かなり新しい時代に入ってきたものであることにはまちがいないだろう。このビルマ→タイという移動の流れは，小規模にではあるが，現在でもなお続いているといえる。私が村に住んでいる間にも，ごく最近ビルマから来たばかりだという者もいたし，また実

アカ族の村，セーンチャイ村

際に国境を越えてくる連中にも会ったことがある。住みつくために入ってくるだけでなく，売買や見物の目的でメーチャンの町まで入ってくる者もいる。このことは他の山地民についても同様である。山地民以外に，ビルマのシャン族の反乱兵で中央政府と戦って負け落ちてくる者もおり，多い時には200人くらいが同時に国境を越えることもある。彼等の官部はたいてい中国人であるが，兵卒の中には，わずかながら，パラウン，ワ，カチンなどの種族が混じっていることもある。同じシャン族でも兵隊とは別に，経済的な理由でタイ国に来る者があり，彼らは山地民の村と平地のタイ人の町との中間あたりに小さな部落を作っている。他に，国境線近くの Hin Taek という所には国民党の残兵のキャンプもあり，その他アヘンを扱う中国人などもおり，山の中の田舎ではあるが，ある意味では国際的な所である。ざっとした印象にすぎないが，この辺ではアカ族が最も生活水準が低いのではないかと思う。アカ族の子供が数百バーツでヤオ族の村へ奴れいとして売りわたされるというようなことが今でも行なわれている。

3 アルー村

私は，最初，西田助教授とともに，メーチャンから15キロばかり山に入った所にある Chiengrai Hill Tribe Welfare Settlement（以後，タイ語名よりニコムと呼ぶ）において，アカ語の調査を開始した。このニコムから5キロほど北にあるセーンチャイ村というのが一番近いアカ族の村である。はじめは，いきなり村に住むことはせず，セーンチャイ村からニコムまで毎日インフォーマントに出てきてもらうことにした。ここでうまくタイ語のできるインフォーマントを見つけることができたのは，初期の調査にとって大きな助けとなった。その後，西田助教授がターク県のドーイムソー（／dɔɔj musəə／）に移られてから，私だけがアカ語の調査を続けるため，更に奥のアルー（／'alù／）という村に住み込むことに決めた。

セーンチャイ村からアルー村まで約10キロたらず，メーチャンからは30キロたらずということになる。アルー，セーンチャイ共に村長の名前であって，アカ族の村はその村長の名前をもって村の名前とするのが普通である。ただし，セーンチャイというのはタイ語名であって，これは彼がタイ国政府よりタイ国内におけるアカ族のリーダーに指名された際に与えられたものである。彼はタイ語（北部方言）を話すことができるが，これが指名を受けた主な理由になっている。英語のできるタイ人あるいは日本人の場合と似た所があっておもしろい。アルーの方は，もとはその兄が村長であったところ，この男がアヘンで駄目になったため，村の長老連中の推薦により村長になったのである。セーンチャイが他のアカ族から恐れられているに対し，アルーの方は非常に尊敬されていて，実際上はより大きな信らいを受けているように思われた。以前は数十名の小さな村だったというが，今では300人余りの大きな村になっている。これはアルーに対する信らいによるものだといわれている。

この村に住み込むに当って，まず①住居と②言語（ここではタイ語が通じない）とが問題となった。しかし，運よくも，ビルマから来たシャン族の青年でシャン語，ビルマ語，アカ語，ラフ・ナ語，英語を話すことのできる男を見つけ，彼を助手兼雑役係としてやとうことによって，言葉の点は解決した。また住居についても，村に小屋を建てて住もうということに決めたところ，3人のアカ族の手によって，1日でできあがってしまい，この点も別に何ということもなくうまく

アカ族の子供，アルー村にて

いった。ここでこのウ・サムという男と住むことになったわけである。米とブタの皮をかわかしたもの（／khɛ̂ɛp mǔu／）とを買いこみ，野さい類は適当に手に入れることにしたが，とにかく不自由することなくうまくやっていけた。

この村で生れて育った者の中から，20才くらいの男子をインフォーマントとして選び，聞き取りを行うと同時に，できるだけひろく村人とつきあうことによって，自然な資料を集めるようにつとめた。文字を持たず書き言葉というものがないので，村が変れば言葉も少し違うといった様子である。例えば，先に述べたセーンチャイ村とこのアルー村とは10キロも離れていないにかかわらず，両者の言葉は少しちがっている。すなわち，セーンチャイ村の／ts-, c-／はアルー村ではともに／c-／となり，／tsh-, ch-／は／ch-／，／dz-, ǰ-／はともに／ǰ-／，／z-, j-／はともに／j-／，／s-, š-／はともに／s-／となっている。同じアカ語でも，ビルマ，ラオス，雲南で話されている方言を調べればさらに異ったものが多くあると考えられる。アカ語は，ビルマ語，ラフ語，リス語などとよく似ており，その音節構造は CVC であって，3種のトネームを有する。たとえば，／ǰɔ́-／<いる，ある>；／ǰɔ-／<習う>；／ʼaǰɔ̀／<馬鹿者>といったぐあいである。語順も，「主語・目的語・述語」である。例えば／ŋa hɔ́ ǰà the／<私は，御飯を，食べる>。

アカの村での1日は，まず水くみから始まる。それについで米つきである。この2つは普通子供と女性のうけもちである。昼間は男女ともに畑に出て，時期によっては，老人と子供だけしか村に残っていないこともある。焼畑農業で陸稲を作っているが，その他にヒョータン，ワタ，カボチャ，アヘン，トウガラシなどが主な作物としてあげられる。家畜としては，ブタが主でそれについでニワトリ，犬であるが，村によっては牛を飼っているところもある。農閑期には，女性は布を織ったりワタをつむいだりしているが，男子では狩りに出る者が多い。そして森でとれる生き物ならほとんど何でも食べると思ってよいだろう。

村では娯楽がとぼしい。商店とか映画とかの類もなく，村の若い者にとっての最大の楽しみは，毎晩おこなわれる寄り集まりであろう。これは雨さえふらなければ必ず行なわれる一種のキャンプファイアのようなものである。村には，そのための場所が作ってあり，おどり，歌，デートなどすべてここで行なわれている。これは適当な結婚の相手を見つける場ともなっている。一般に男女関係は非常に自由で開放的である。血族結婚は案外すくないようである。農閑期が結婚のシーズンになるが，そのころには何日も歩いて結婚の相手を探しに出かける者も多く，村は想像されるほどとざされたものではないと思われる。

ここでの調査は，自分の事以外にいろいろなつき合いのために相当な時間が必要で，実際に聞き取り調査についやせる時間は1日に5時間程度しか残らない。しかし，言語以外のことがらもだんだんとわかってきて，やはり村に住み込んでの調査のほうがよいと思う。今までの段階では，主として他言語を媒介としての調査であったが，これから先は媒介となる言語の構造にえいきょうされない自然なデータを得るために，monolingual な調査を進めたいと思っている。またこの地域のアカ族の村をできる限りたくさん歩きまわって，おのおのの村で話されている方言の資料をも集めたいと思う。

1965年10月7日，バンコクにて